



Title	2025年度 意匠学会論文賞・論文奨励賞選考結果報告
Author(s)	
Citation	デザイン理論. 2026, 88, p. 5-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106183
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2025 年度 意匠学会 論文賞・論文奨励賞 選考結果報告

学会賞選考委員会
副委員長 今井美樹

論文賞

多田羅多起子

近江日野の商家における書画コレクション形成と活用の記録
—— まとまりのある資料群の価値

選考理由

多田羅多起子会員の表題の学術論文は、近代の近江日野商人の書画コレクションを、その内容とともに、当時の暮らしや地域社会との関連にまで言及した調査分析・論述である。某家に伝わる目録『書画図鑑』（昭和 21 年）を手掛かりに、幕末期から昭和戦前にかけての書画受容の実相を明らかにした。

論文では、先行研究から商家コレクションがもつ役割、近代の暮らしの中での書画の在り方、日野地域における商人の文化的なネットワークや画人への支援など、多面的な関係性を確認している。その上で、『書画図鑑』の内容を分類・分析してコレクションの特徴を示し、これらの作品群が、当主の個人的趣味にとどまらず、応接や年中行事といった「しつらい」を主目的とした、商家ならではの書画収集の在り方を詳細に示した。

本論は、定量的分析になりがちな目録資料を、美術品の「活用」に焦点を当てることで、定性的な分析へと深め、地方商家のコレクション価値の新たな側面を見出した点が評価された。今後このような地方の商家や豪農層のコレクション研究によって、近代日本の地方文化が明らかにされていくことが期待される。また、本論の事例のように、個人コレクションの維持や保存が困難になっている近年、まとまりのある資料群がもつ歴史的・文化的価値を検証したことは、記録的にも極めて意義深い。

執筆者はこれまで近代の京都画壇に関する研究を積み重ねてこられており、それら一連の研究と関連づけることで、本論の成果にはさらなる意義が期待できるとして論文賞に相応しいと判断された。

論文奨励賞

はしもとさゆり

近代日本の靴下繕い ― 20 世紀前半の新聞記事を中心とした分析

授賞理由

はしもとさゆり会員の表題の学術論文は、1901～1950 年に掲載された靴下に関する新聞記事 527 件のうち、特に「靴下繕い」に関する 54 件に焦点を当て、衣生活の持続性やジェンダー役割の先行研究を踏まえた上で、家庭における修繕という不可視な労働を分析した論述である。これらの記事の殆どが十五年戦争期に集中しており、靴下繕いの創意工夫が、戦時下のプロパガンダに乗じて生活規範として確立し、社会的意味へと変容していく過程を明示した。

論文では、繊維供給の推移、代用品スフとその手入れ法、配給制（衣料切符制）に伴う靴下繕いの盛り上がり、大政翼賛会による「間に合わせ運動」といった史実を、新聞記事や読者投稿と時系列に照らし合わせ、論証の確実な裏付けをおこなっている。またこのような家庭内の修繕行為は既存の戦時研究では顧みられることはなく、衣生活や手仕事に関する研究からも見落とされてきたと括っている。

本論は、衣生活を「修繕」の観点から論じる着眼点がユニークであり、デザインが生産・消費の側面で論じられることが多いのに対し、デザイン史研究に新たな視点を提供したこと、さらにジェンダー論へと広がる問題をも孕んでいることが評価された。現在博士課程での研究中ということもあり、今後の発展が期待できる萌芽的な論文として、論文奨励賞にふさわしいと選出された。

選考経緯

『デザイン理論』86 号、87 号に掲載の 8 編を対象とし、学会賞選考委員 8 名で事前に各委員が 1 位・2 位・奨励賞の選出とその理由を記述し、これらの結果をもとに、2026 年 3 月 26 日に委員会を開催し協議した（欠席 2 名）。協議の結果、全員一致で上記の結果を得た。

はしもと会員については、作品奨励賞の受賞との兼ね合いについて議論がなされたが、論文奨励賞の選出において特に問題はないものとして承認された。

以上